

氏 名	安 田 章 一 郎 やす だ しょう いち ろう
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 54 号
学位授与の日付	昭 和 45 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	G.M. ホプキンズ研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 御 輿 員 三 教 授 菅 泰 男 教 授 谷 友 幸
--------	--

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、19世紀後半のイギリスが生んだ特異な詩人ホプキンズ (Gerard Manley Hopkins, 1844—89) の本質を解明せんとしたものであって、主として伝記的角度から作品成立の背景を究明した第一部 (7ページ—161ページ)、主要作品の翻訳を試みることを通じてホプキンズ独特の詩法を追体験せんとした第二部 (164ページ—330ページ)、および、ホプキンズの詩を他の詩人の作品から区別する二、三の特徴的な問題点のもつ意義を追究せんとした第三部 (332ページ—449ページ) とから成っている。

第一部は、さらに三章に分かれ、第一章では、ホプキンズがオクスフォードに在学していた数年間に重点を置き、彼が当時のオクスフォード大学の自由主義的思想の代表者であった、ジャウエット (Benjamin Jowett) の影響から次第に離れ、いわゆる「オクスフォード運動」の指導者であったニューマン (John Henry Newman) に接近、ついにカトリック教に改宗し、イエズス会に入会するに至った経緯を説いている。

第二章では、イエズス会入会後のホプキンズの思索の結集点ともいうべき「インスケイプ」(inscape) および「インストレス」(instress) なるアイディアが、ダンズ・スコウタス (Duns Scotus) やイグネイシアス (Ignatius of Loyola) の思想に親しむことを通じて徐々に形成されていったあとをたどり、さらにその理念が代表作「ドイツラウド号の難破」('The Wreck of the Deutschland') に見られる技法として結実した経過を追求する。

第三章においては、主としてホプキンズの晩年の生活を扱い、自己の実生活がイエズス会の掲げる理想に厳密に合致しているかどうかを疑いつづけた、あまりにも潔癖な自責と、加えて、きわめて日常的な生活をすら困難ならしめた病弱とが、晩年のいわゆる「恐ろしいソネット」群の背景となっていることを論じ、それらの作品をもって詩人ホプキンズのイエズス会士ホプキンズにいたる反逆と見る俗説に疑問を投じている。

第二部では、ホプキンズの未完の詩・断片・翻訳等を除く、いわゆる完成詩76篇が、すでに述べた意

図のもとに日本語に移されている。

第三部は四章に分かれ、第一章では、ヴィクトリア朝詩人としてのホプキンズの特異性を強調せんとする学者・批評家の一派と、逆に、時代に先駆けたその現代性を重視する他の一派との論争に焦点を絞り、両者それぞれの主張のよってきたるゆえんを明らかにしつつ、ホプキンズには、ヴィクトリアニズムに徹することによって、かえって普遍性を獲得している面のあることに注目、その意味で彼の詩は現代詩にたいしても多くの示唆を与えたと論ずる。

第二章では、問題を前述の「インスケイプ」に限定し、前章と同様の趣旨で、それがきわめて特殊な思想であるにもかかわらず、創作一般の核心に触れる問題を孕んでいることを指摘する。

第三章においては、当初は単に新奇な実験としか一般には受けとられなかったホプキンズのいわゆる「スプリング・リズム」(sprung rhythm)なる韻律が、やがて、ホプキンズの詩の内容のもっとも忠実な表現を考えられるに至った評価の歴史的変化を跡づけつつ、同時に、ホプキンズには、詩の内容から独立した一種の普遍的なリズム感覚もあって、それが「スプリング・リズム」をある隠微な仕方で支えているという見解を提出している。

第四章では、「牧羊者の額(ひたい)も……」(‘The shepherd’s brow……’)なるソネットが、最近まで未完の作品視されていた事実を取り上げ、そのような誤解の裏にひそむ事情を解明することを通じて、晩年の作品全般の特質を明らかにしようとする。

なお、本論文には別冊として400ページを越える詳細な作品注釈が添えられていることを付記しておきたい。

論文審査の結果の要旨

ホプキンズの詩集が初めて出版されたのは、死後およそ30年を経た1918年のことであって、それまでは、詩人としてのホプキンズは、生前親しく交わったごく少数の者を除き、一般にはまったく知られていなかった。詩集が公刊されてのちも、その詰屈な詩風のため容易に世間一般の認めるところとならず、学問的対象として多かれ少なかれ体系的な研究が始められたのも、ようやく1940年代に入ってからのことであった。

わが国においても、従来この詩人に関する研究は断片的・散発的に行なわれたにとどまり、総合的・統一的研究としては、著者の本論文をもって嚆矢とする。

著者は、まず第一部において、伝記的角度から作品への接近を試みる。伝記的方法是、とくにホプキンズのごとく特殊な生涯を送った詩人の場合にあっては、すぐれて有効であり、むしろ不可欠であるとすら考えられる。ことに、ホプキンズが生得的に具えていた繊細無比な感受性が、みずから選んだ厳格な修道生活のなかで独自の発展を遂げる経緯と、その間さまざまの秀作が生まれる機因とを明らかにした著者の筆致には、鋭い洞察と深い理解とが感ぜられ、全体として説得力に富む好論となっている。

ただ、難をいえば、ホプキンズ独特のいわゆる「インスケイプ」および「ストレス」・「インストレス」なる観念が、主としてダンズ・スコウタスの著作に親しむことによって形成されたことは著者の説くところであるにしても、それらの観念とスコウタスの“haecceitas”なる観念との隠微な関係は、著者によ

でもなお十分に解明されているとはいいいがたい。しかし、この問題は、少なくともその細部にわたっては、欧米の学界においてもなお未解決のまま残されていることを思えば、現在の著者にその徹底的究明を求めるのは過大な要求であろう。

第二部は、ホプキンスの主要な作品の邦訳に充てられている。著者が翻訳を試みた意図は、近代詩においては類例を見ない、この詩人のきわめて特異な詩法を、ただ対象的に理解するにとどまらず、作品そのものを日本語に移しかえる作業を通じて、できればホプキンスの創作心理を追体験し、それによってその詩法の秘密を内的に把握せんとするところにあったと思われる。ただ、ホプキンスが縦横に駆使した古語・方言にたいする著者の習熟度はかならずしも十分とはいいがたく、また、それらに照応すべき著者の日本語の語彙も、豊富というにはやや遠いうらみがあって、著者の多大の努力にもかかわらず、かならずしも成功を収めたとはいいいがたい例が散見されるのは遺憾である。

第三部では第一部および第二部の成果を踏まえて、代表的な作品数篇の文学的価評が試みられている。著者は、ホプキンスの作品は、あくまで、ヴィクトリア朝時代という英国史上の特定の時代の産物であり、その時代の色調に色濃く染められているとする。しかし、同時に、ホプキンスは、時代性に徹することによって、かえって普遍性を獲得している面があり、ホプキンスが現代詩人のある者に与えた影響の真の原因もそこに求めなければならないと論ずる。同様の趣旨で、ホプキンスのいわゆる「スラング・リズム」なる工夫も、外面的には恣意的であり特殊であるかに見えるにもかかわらず、それが、一方、ホプキンスの内奥の欲求に密接な関係を有し、他方、英語の本質的・普遍的なリズムによって密かに支えられていることを指摘する。その指摘の可否は、厳密に言えば、詩人が残した草稿の多くに見られる独特の音価表示記号の今後における詳細な検討によって決定されるであろうが、著者の着眼はおおむね妥当のよう考えられる。

要するに、本論文は、部分的にはなお追究不十分な点を残しているけれども、それはこの難解な詩人の先駆的な研究としてはある程度不可避のことであり、本論文がわが国のホプキンス研究において持つ基礎的な意義は、そのことによっていささかも損われるおそれはない。

別冊として添えられている入念な作品注解は、さらに欲をいえば、これを別冊とせず、第二部と融合せしめ、作品の翻訳を試みるかたわら、たとえば同一のことばが創作年代を異にする作品にあっては別様の含意をもって使用されている例に着目する等、ホプキンスの言語感覚の諸相をあるパースペクティブのもとに提示する考慮が払われていたならば、いっそう有意義であつたろうと思われるけれども、現在の形のままでも後進の研究に資することきわめて大なるものがあることは疑いをいれない。

以上審査するところにより、本論文は文学博士の学位を得るに価するものであると認められる。